

## 第二次世界大戦期のインド国民会議派と中印関係

平成 24 年 5 月 16 日

水野光朗

### 1. はじめに

本講で明らかにすること：

インドにおける反英民族独立運動は、当初、イギリス植民地支配からの民族独立のみならず、中国における抗日運動との連帯をも指向し、中印関係の強化発展も意図していた。中国側も、インドとの関係強化を指向していた。しかしながら、第二次世界大戦が展開するにつれて、中印関係は質的な変化を遂げるようになった。

インド民族運動の歴史を振りかえってみると、その重要な特徴として、周辺の被抑圧諸民族との連帯行動の発展と拡大を誰しも認めざるをえない。特に東アジアとの関連では、中国との民族運動との連携が、想像以上に強固である歴史的な事実をもはや見逃すことは許されない。

中村平治、「インド民族運動の展開と東アジア」（中村平治著、『現代インド政治史研究』、東京大学出版会、1981年、187ページ。）

### 2. インド国民会議派と世界各地における反帝国主義・反植民地主義運動

#### 1. 会議派第 49 回大会（1936 年 4 月；ラクナウー）

帝国主義が世界各地で増長していることに危機感を表明。

#### 2. 会議派第 50 回大会（1936 年 12 月）

ネルー：パレスチナにおけるアラブの反帝国主義闘争が、インドの独立闘争と同様に世界的な衝突の一部をなしている。

#### 3. 会議派全国委員会（All India Congress Committee）カルカッタ大会（1937 年 10 月 29 日）

- (a) 中国に対する日本帝国主義の侵略を批判
- (b) 民族的な危機に直面した中国人民の独立闘争を支持
- (c) インド人民を代表して中国人民との連帯を確認

(d) 中国人民への同情のしるしとして、インド人民に日本製品のボイコットを要請

### 3. インド医療使節団 (1938年9月1日- 1943年5月)

M. Atal, M. Cholkar, D. Kotnis, B.K. Basu, D. Mukerji  
コートニース以外はインドに帰国

### 4. ネルーの訪中 (1939年8月21日- 9月) と蒋介石の訪印 (1942年2月9日- 24日)

#### a) ネルーの訪中

重慶訪問。国民党幹部 (蒋介石ら)、ムケルジー、葉剣英らと会談。

#### b) 蒋介石の訪印

中印の「連帯」を強調。

	ネルー・会議派	蒋介石・中国 (特に国民党)
最重要課題	インドの独立	連合陣営 (インドを含む) の強化

### 5. スーバス・チャンドラ・ボース (1897年- 1945年)

イギリスに敵対するものは、だれでもインドの同盟者の役割を果たしうる。

ボースの思想の特徴には、反英主義が一貫していながら、帝国主義批判の視角は欠落していたことが認められる。今述べた点と関連して、ボースの独立運動はインド国内に拠点を確保できなかったことである。

中村平治、同論文、180 ページ。

## 6. 小括

### a) 「中印連帯」が意味するところの変化

反帝連帯	↔	a) 第二次世界大戦・連 合軍同士の関係強化	↔	インド：独立
		b) 会議派による反英民 族独立運動の展開		中国：連合国の一員と しての立場強化

### b) 今後解明する必要がある事柄

- i) インド共産党 (1942年7月に合法化)、全インドムスリム連盟と中印関係
- ii) インド・パキスタン分離独立 (1947年8月) と「中印連帯」